

# 人間教育に資する「幼小接続期カリキュラム」のあり方 —「とまどいマトリクス」を活用した接続カリキュラムの改善—

(平成 27 年 8 月 23 日提出, 平成 27 年 10 月 20 日受理)

## Proposals to “Kindergarten-Elementary school bridging curriculum” in Human Growth —Improvement in the bridging curriculum by using “confusion matrix”—

奈良学園大学人間教育学部人間教育学科  
善野 八千子  
ZENNO Yachiko  
Nara-Gakuen university  
Faculty of Education for Human Growth

キーワード：幼児期と児童期を接続するカリキュラム, 「とまどいマトリクス」, 人間教育

**Abstract** : It has been clarified what are the difficulties in preparing an “infancy-childhood bridging curriculum,” but it cannot be said that the process of preparing it has been sufficiently studied. In this study, I analyzed the essential factors for improving an “infancy-childhood bridging curriculum.” As a result, I found the three points below in the use of the “confusion matrix” regarding improvement in an infancy-childhood bridging curriculum for greater contribution to the human education.

- (1) The confusion matrix can be a tool for consensus formation within a kindergarten for improving the infancy-childhood bridging curriculum.
- (2) The confusion matrix makes it possible to improve the infancy-childhood bridging curriculum according to the actual states of children.
- (3) The improvement of the infancy-childhood bridging curriculum allows advertising the characteristic feature of kindergarten-elementary school linkage.

The following two points should be further studied in the future. Firstly, creation and improvement in the “start curriculum” in elementary school have not been clarified. Secondly, the view point of improvement in the bridging period curriculum has not been clarified. For this, it is necessary to investigate on establishment of kindergarten-school ties by studying how the kindergartens and schools with the infancy-childhood bridging curriculum have changed over years.

**Keywords** : infancy-childhood bridging curriculum, “confusion matrix”, human education

### 1. 問題の所在と研究目的

幼児期の教育から小学校教育への接続は、国内外を問わず教育改革の課題である。

海外においては、多くの先進国の教育課程の中心に、幼児期と児童期の移行(transition)は位置づけられている。OECD から出されている報告書”Starting Strong”(邦題「人生の始まりこそ力強く」<sup>(1)</sup>)が述べているように、子どもたちの発達を保障する実践が早期から必要になっている。

OECD バーバラ・イッシンガー教育局長らの研究チームによると、制度が日本に似ているベルギーでは

幼稚園と小学校の教諭資格の統合も進んでいるという。つまり、人間の基礎教育の形成となる乳幼児期の保育・教育への投資が重要とする考え方である。この考え方について、合田(2009)は、「教育を人生前半の社会保障」に位置づけるアイディアは、教育再生懇談会の第四次報告(2009年5月28日)で明記され、安心社会実現会議(同年6月15日)、骨太方針2009(同月23日閣議決定)にも影響を与えた<sup>(2)</sup>。

そして、OECD 保育白書(2011)には、保育・教育の質を保証するための具体的な手立てとしてカリキュラムの作成が掲げられている<sup>(3)</sup>。

国内においても、「学校で扱う学習内容のミニマム」

とされる学習指導要領を柔軟に解釈し、保育者・教師・各学校園が独自のカリキュラムを創造していく時代である。

文部科学省の調査研究協力者会議(2010年)が示した「幼児期の教育と小学校の教育の円滑な接続の在り方について」(報告)<sup>(4)</sup>においては、接続期は「幼児期の教育から児童期の教育への単なる準備期間や慣れの期間と捉えるべきではない。幼児期全体と児童期全体を通じた子どもの発達と学びの連続性を意識することが必要」とされた。

さらに、文部科学省(2015)が発行した「スタートカリキュラムスタートブック」においても、「幼児期からの学びと育ちを生かす活動や環境を意図的に設定することで、子どもは意欲を持って活動し、自己発揮できるようになります」と述べられている<sup>(5)</sup>。

幼児期と小学校の教育を接続する就学前後の問題は、いわゆる「小一プロブレム」に代表される入学後に授業が成立しにくい状況が問題となって久しい。「小一プロブレム」とは、小学校入学に見られる「不適応状況」のことである。

詳しい現状は、「不適応状況の発生の要因」の調査結果(平成21年東京都教育庁)<sup>(6)</sup>に、みてとれる。その様子は、「授業中に勝手に教室を立ち歩いたり、教室の外に出て行ったりする」「担任の指示通りに行動しない」、教育的配慮や支援を要する児童に担任が個別対応している間に他の児童が勝手なことをしている」等であった。

これらの様子は、いつ発生し、いつ終息に向かっていったのか。第1学年児童の不適応状況が発生する時期は「4月」、次いで「5月」である。明らかに、入学直後の環境移行の際に発生している。続いて、終息時期について見てみると、半数以上が「11月」までに終了していない。

その中で、筆者が目にしたことは、2点ある。1点目には、不適応状況の要因の捉え方を就学前の問題点として指摘していることである。小学校校長・教諭は共に、「就学前の教育において、児童に小学校生活に耐えられるだけの就学能力及び基本的生活習慣が身に付いていなかったこと」を上位に挙げている。

2点目に、対応策(表1)の約8割が、人的措置であったことである。担任以外の教諭、管理職、教育委員会、保護者による協力等の人的措置という「対応」の策である。その後、加配によって、一時的に不適応状況の減少は見られたものの、前述のように11月でも終息せず、解決に向かってはいない。

その他の対応として、これまで直接関わってきた幼児教育関係者への迅速な聴き取り等は、あったのだろうか。それは、小学校における「幼児期からの学びと育ちを生かす活動や環境を意図的に設定する」ための基本情報とできたのではないだろうか。

和田(2008)は、「一つには、小学校に入る前の段階に課題があると思われます。…(中略)…就学前の教育や保育に課題はないでしょうか。二つ目には、小学校1年生の指導計画に課題があると思います。<sup>(7)</sup>」と幼児期と小学校の教育の双方の課題について述べている。

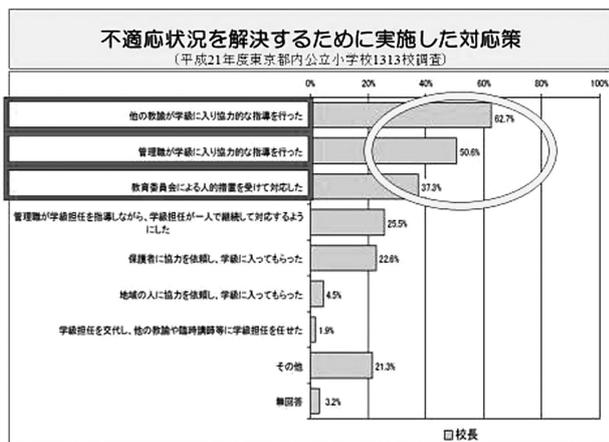
幼児期終期の階段部分でもなく、小学校から始まる階段部分でもない学習者にとっての接続部分である「階段の踊り場」で、指導者が責任転嫁しあう事などあってはならない。互惠性を持って見直し、幼小双方の責任と協働が求められるのである。

無藤(2007)は、「教育はいかなる段階でも白紙で始まるということはない。…(中略)…だが、校種毎の教育というのはそういった『白紙モデル』を想定しているようであり、そのゼロの状態から卒業時に100の状態にもっていくといった教育課程を考えている」<sup>(8)</sup>と指摘している。

前述したように、保育・教育の質を保証するための具体的な手立てとして、カリキュラムの作成が重要となる。

善野(2012)が作成した「とまどいマトリクス」<sup>(9)</sup>(別表1)は、子どもの実態や発達段階または経験の違いを勘案しながら、接続期カリキュラムを工夫改善していくためのツールである。

本来、幼小双方の教職員が合同で作成することを前提とする。しかし、幼小合同研修は円滑に機能しているとは言い難い<sup>(10)</sup>。教職員が一緒に研修を行ったり、保育や授業に参加したりしている実態は十分とは言え



ない。また、子ども同士の交流によって、教職員間の子ども理解が進んでいるとはいえない現状がある。

全国的に、幼小連携を実施しているという学校園は拡大しつつある。しかし、「年数回の授業・行事・研究会などの交流があるが、接続を見通した教育課程の編成・実施は行われていない。」「連携・接続を計画中」、「着手したいが、まだ検討中」など、接続カリキュラム作成の趣旨や目的が理解されずに検討中の学校園も多くある<sup>(11)</sup>。

また、接続期カリキュラムを作成する上での課題については、明らかにされているが、作成のためのプロセスが十分研究されているとは言えない。

本稿では、次の手順で「とまどいマトリクス」を活かした接続期カリキュラム改善の課題を考察する。

(1)本研究における接続期カリキュラムの役割を明らかにする。

(2)「とまどいマトリクス」を活かして、接続期カリキュラム改善に取り組んだ事例を紹介する。

(3)考察を通して、成果と課題を明らかにする。

人間教育は、「学習者一人ひとりの個性的で主体的な成長を実現していく教育」である。接続期カリキュラムのさらなる改善は、これからの幼小接続教育の展開において、「人間的成長の重視」に資することになると考える。梶田(2014)は、「学校教育を人間的なものにしなくては、という主張や実践的試みが最近特に目につくように思われる。(中略)そこには、ある共通の基盤があるように感じられる。一つは現在の学校教育がはらむ息苦しさから学習者を解放していくこと、もう一つは現在の学校教育で決定的に不足している人間的成長の面を重視していくことである。<sup>(12)</sup>」と述べている。

「現在の学校教育がはらむ息苦しさから学習者を解放していく」ことの一つとして、「とまどいマトリクス」はその役割を果たそうとしていたかを考察する。学習者の視点に立って作成された「入学後の子どもとまどい」を分析した結果得られた「連続した子ども理解」をもとに、人間的成長の面を重視した取組を幼小の指導者が協働的に深めているかについても検討していきたい。

## 2. 分析の視点

まず、木村吉彦ら(2010)による『「幼小連携」とは、「同じ目的を持つ者が互いに連絡を取り、協力しあって物事を行うこと」である。…(中略)…また、

「幼児教育と小学校教育」とは、「人生の初期段階にある幼児・児童の実態に即して、「生きる力」の基礎的資質能力を育成するという共通目的の下に、子どもを育てる営みである。」としている。それぞれの教員達が、幼児教育と小学校教育についてお互いのことをよく知り、理解し合うことで連携が可能になる。単なる「5歳児と小学校1年生との間の連携問題」ではない。幼児期から児童期にかけて連続的に成長する一人一人の子どもが、滑らかに小学校生活に適応し、(小学校という)新しい環境になじみ、意欲的に過ごせるようになるための手助けが、おとなの果たすべき役割である。<sup>(13)</sup>」としている。

「アプローチカリキュラム」とは、横浜市教委が提案した名前である。幼児教育の最終段階である5歳児教育の後半(10月～)における、小学校入学後を意識したカリキュラムを指す<sup>(14)</sup>。

文部科学省では、この「アプローチカリキュラム」と「スタートカリキュラム」の両方を含めて、接続期カリキュラムと呼んでいる。

木村(2012)は、「アプローチカリキュラム」について、「集団による遊びや話し合いや友達の前で自分の考えを語るような集団活動も取り入れる、昼食時間を小学校の時間に近づける、椅子に座って先生やお友達の話聞く場面を設ける、等」の具体例をあげ、「小学校との交流授業や行事への参加、1日入学など、やがて自分の生活場所となる環境に慣れ親しむような機会を提供することが重要である。<sup>(15)</sup>」としている。

また、無藤(2014)は、「従来子どもの交流や保育者・教師の共同というあたりの連携に止まっていたものが、それに加えて、カリキュラムの接続を重視することに進んでいます。そして、小学校を見通した教育・保育の内容を求めています。それは、小学校に向けてであると同時に、教育・保育の質を向上させていくためでもあります。<sup>(16)</sup>」と述べている。

後の考察において、先述した幼小連携及び接続カリキュラムの役割を果たしているかをふまえて、接続カリキュラム改善の在り方を検証する。その上で、調査対象園の「幼小連携」及び「アプローチカリキュラム」から、「とまどいマトリクス」を活かした接続期カリキュラム改善の在り方を検討していくこととする。

## 3. 研究の概要

### (1) 先行研究の振り返り

善野(2012)は、接続期カリキュラム作成と改善の

ためのツールの一つとして「とまどいマトリクス」を提示している<sup>(17)</sup>。

いわゆる「小1プロブレム」の態様について、指導者が困っている状況からではなく、学習者である子どもが「入学後に戸惑っている状況」に着目した。その要因を幼児教育と小学校教育の双方で検討することによって、「子どもの育ちと学びをつなぐカリキュラム」の改善ができると考えた。

「解決するための手段や方法が思いつかず、どのように対応したらよいか困ってまごつく状況」を「とまどい」と定義し、そういう場合の入学後の子どもの言動を「入学後の子どものとまどい」と呼ぶことにする(以下、「とまどい」と表記)。

筆者は2012年までに、幼小双方の教職員への調査によって「とまどい」事例を収集した。それらの「とまどい」事例を学びの基礎力「知・徳・体」に整理し、「とまどい場面」に分類した。続いて「とまどい場面」について、幼小の違いをふまえて検討する中で、「とまどい要因」の6項目(①時間②空間③人間④もの⑤技能⑥心情)を抽出した。その「とまどいマトリクス」を活用して、カリキュラムを検討しながら見直し、改善するものである。

子どもが「幼児期には、できていたのに、やりにくくなったこと」、「小学校で初めて体験することで、とまどうこと」は何かについて、幼小双方から得たとまどいマトリクスに示された事実から「連続した子ども理解」を深められると考えられる。

## (2) 調査対象校選定の経緯

幼小合同で実施したワークショップにおいて、「とまどいマトリクス」を活用したことで、「接続期カリキュラムを見直した」「接続期カリキュラムが改善した」等の事後報告が多数寄せられた。そのような教職員の主観的な実感だけでなく、接続期カリキュラムの目的や役割に照らして検証していくことが必要であると考えた。

しかし、「とまどいマトリクス」を活用して、接続期カリキュラム改善に活かすプロセスを詳細に分析するには、多様な学校園の背景や実態から総合的、構造的に把握することは容易でない。

筆者は新たに本研究において、Y市立A幼稚園のケーススタディを行うこととした。

## (3) 調査対象園及び調査内容と方法

調査対象学校園の選定理由は、以下の3点である。

①継続した幼小連携を実施している。(2008～2014年度)

②同じ担当教諭と園長が関わっている。

③「とまどいマトリクス」活用以降に、幼小連携及び接続期カリキュラムの改善に具体例がみられる。

(4) 調査時期：2013年6月～2014年6月

## (5) 調査内容と方法

①継続した幼小連携に関わったB教諭とC園長に、聞き取り調査を5回実施した。

②当該園の研究発表会に参加し、聞き取り調査と併せて実態調査を実施した。

## 4. 取組の紹介

調査結果として、「とまどいマトリクス」を活かした改善の取組が多岐にわたって見られた。ここでは特に、「接続期カリキュラム作成と改善」及び「一日体験入学から学校ごっこへ」の2点について紹介する。

### (1) 接続カリキュラム作成と改善

#### ①園の概要

A園は、X小学校と同じ敷地内にあり、園庭と小学校の中庭がフェンス1枚で隣り合わせているという恵まれた立地条件である。5歳児51名(2クラス)4歳児35名(1クラス)の86名の園児数である。例年、修了児の8割強の子どもたちがX小学校へ入学し、1年児童数の約半数がA園の修了児である。

#### ②幼小連携の経緯

- 幼小連携の必要性を認識し、小学校祭り・1年生との交流(昔遊び)・体験入学・給食交流などを行ってきたが、小学校主導の交流であった。
- 2008年度よりX小学校の20分休憩に境界フェンスの門を開け、小学生と園児が触れ合う「園庭開放」の機会を設けた。取り組みから数年経過すると、園庭で遊ぶのは卒園児がほとんどで、学校生活に慣れた頃には自然と園に来る子どもの数が減少していった。

#### ③「とまどいマトリクス」の活用以降の接続期の取り組み

取り組みにあたって、まず教職員がつながるようにA園からの発信を多くし、X小の教職員に知ってもらおう努力をした。また、幼小の双方が負担とならないような活動とした。さらに、互惠性があり、継続性して定着していけるように一步一步深めていきたいと願って取り組んでいる。

- 日常的に行ってきた“園庭開放”を『幼小連携』という視点で見直し、教職員が意図的にかかわるようにした。



幼小の境界フェンス門に掲示された遊びの目的や日程及び内容



休み時間に幼小境界フェンス門から入ってきた小学生の「かけっこ先生」と園児たち



休み時間に幼小境界門フェンスから入ってきて交流する小学生と園児たち

- ・誰もがA園に来て遊びを楽しみながら、かかわりがもてる場の環境構成や教材の工夫をした。
- ・取り組みの様子を掲示板や園便りを通して、X小の教職員、小学生、保護者、地域の人に発信した。
- b. 交流や行事等の参加には、A園のねらいや配慮等を日案にして事前にX小に手渡して参加した。
- c. 話し合いの大切さをX小に伝え、短時間でも交流前に打合せの時間を確保した。
- d. 交流時の子ども同士の感想を伝え合う時間を設定した。
- e. 交流後の評価や子どもの言葉、遊びの発展等をX小に知らせた。
- f. X小と「学びの基礎となる自立と協同性を育む」ことを育てたい子どもの姿として共有した。
- g. 「入学までに身につけることが望ましいこと」をX小教職員との話し合いの中から、共通理解したうえで、園生活を学校生活に近づける工夫をした。
- h. 保護者に就学前アンケートをとり、その結果をもとにX小の教職員との懇談会を設けた。

#### ④改善されたこと

- a. 園庭開放では、年間を通してA園に遊びに来る子どもの数が増加した。また、園庭開放を実施日と実施できない日及び遊びの内容をフェンスの門に掲示することで小学生が目的をもって遊びに来るようになった。
- b. 園児は小学生が遊びの中に入ってきて、自然に受け入れて一緒に遊びを楽しむ姿が見られる。
- c. 園児にとって小学生とふれあったり、保健指導や給食指導などの共通点を知ったりすることで、学校生活への不安感より安心感の方が強くなっている。
- d. 「とまどいマトリクス」をもとに、毎月の保育カリキュラムや保育指導案の中に、小学校へつなぐ視点をくみこんだ。卒園までに育ててほしい姿や

ねらいを明確にして取り組むことで、教職員の共通理解が得られ保育の質の向上が図られた。

- e. 何度も小学校訪問をした。互いの考えや思いを出し合いコミュニケーションを大切にしてきた事により、教職員の距離が近くなったと感じられる。
- f. 幼小の合同授業において事前に教職員間の話し合いがなされ、小学校教職員の意識の高まりが実感できるようになった。
- g. 保護者アンケートから得た「入学後の子どものとまどい」を把握して、その要因を「とまどいマトリクス」を活用して考察するようになった。
- h. 接続期カリキュラム5歳児の実施・評価から改善につなげた。

#### ⑤今後に向けて

子どもが園生活の中で学んだことが、入学後の学校生活の中にどのようにつながっているのか、小学校教職員と共通理解していくことが大切である。今後も接続期カリキュラムを見直し、より幼小連携に役立つものにしていきたい。また、子どもたちの学びの連続性を保障するためには小学校入学時からの接続期カリキュラムの作成も必要不可欠である。小学校教職員と連携して作成、実践していくことがこれからの課題である。

先述の①～⑤は、B教諭とC園長に、聞き取り調査結果の内容である。

#### ⑥訪問における実態調査

2013年6月、2013年9月、2013年12月、2014年3月、2014年6月、当該園を訪問調査した。聞き取り内容を検証するため、実地訪問をした結果から、次の4段階の変容が見て取れる。

【第1段階保護者の不安から伝わる卒園後の子どもの実態】

【第2段階保護者及び小学校教員への聞き取り調査】

【第3段階《現行のカリキュラム》から「とまどいマ

トリティクス」の活用へ】

【第4段階《現行カリキュラム改善》の探究】

以下に、4段階の経緯を整理して詳述する。

【第1段階保護者の不安から伝わる卒園後の子どもの実態】

2008年園長が直面した問題点と最初の取組は、以下のようなボトムアップ式の園内世論の形成プロセスである。

＜問題点＞

- a. 幼稚園と小学校が隣接している立地条件にもかかわらず、就学前後の情報共有や交流活動が殆どない。
- b. 卒園後の子どもたちの問題行動や、保護者からの不安情報が頻発する。
- c. いわゆる「小1プロブレム」と称される入学後の不適応状態が懸念された。

そこで、ミドルリーダー的存在のB教諭を中心として、園内で情報共有した。

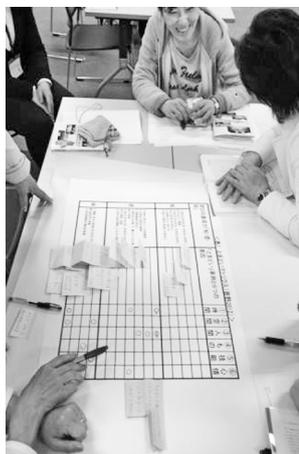
【第2段階保護者及び小学校教員への聴き取り調査】

＜取組＞

- a. 管理職を中心に意見交換を行った。
- b. 園による保護者への聴き取りと入学前調査を実施した。
- c. 園による小学校教員への聴き取りと、入学後調査を実施した。

【第3段階《現行のカリキュラム》から「とまどいマトリティクス」の活用へ】

2012年から「幼小合同研究会」に参加し、「とまどいマトリティクス」を活用する。現行のカリキュラムにおける実態として、「とまどい」要因6項目を視点として考察した。これらを学びの基礎力につなげるための課



合同研修で「とまどいマトリティクス」を活用する幼小教職員

とまどいマトリティクス(香野2012) * A園を含む合同研修 (「学びの基礎力」項目より「知」について、抜粋)	①	②	③	④	⑤	⑥
とまどい事例とその要因	時間	空間	人間	もの	技能	心情
自分の名前の読み書きができない(一部の子)			○		○	
字が読めず入学している子は、他の子と大きな差がついている					○	
筆圧がかからない				○	○	
鉛筆を握ること、ノートを押さえること				○	○	
毎日1~3文字の学習のペースは困難	○				○	
文字の誤ったくせ(まちがいの覚え込み、鏡文字、書き順違い)				○	○	
大きな数の足し算ができて、1対1対応ができない						○
数字の誤ったくせ(まちがいの覚え込み、鏡文字、書き順違い)がぬけず、子ども自身が苦労している				○	○	○
学習の早さについて行けない	○		○		○	○

題を検討した。

【第4段階《現行カリキュラム改善》の探究】

現行カリキュラム改善の視点として、以下の4点に沿って、5歳児の接続カリキュラムを見直し、園内環境を改善した。

- a. 基本的な生活習慣の確認と確立につながっているか
- b. 子どもの学びの意欲は喚起されているか
- c. 教科指導へと分化していく途上において、内容の相互の関連は有効か
- d. 柔軟な時間運用はできているか(短縮15分モジュール、基本45分、延長60分・90分等)

⑦ 実地訪問の調査「幼小連携発表会」

筆者は、「幼小連携発表会」(2013年12月)に参加し、これまでの聞き取り調査内容と現地訪問の整合の再確認をした。

さらに、幼児・教職員・保護者・地域住民の実態把握、資料収集を行った。



一日体験入学の翌日、小学校から借りた机と椅子を置いた保育室で始まった学校ごっこ



一日体験入学の翌日から、先生役を交代しながら継続する学校ごっこ

## (2)改善された取組「一日体験入学から学校ごっこへ」

2013年3月、B教諭、C園長を中心に、「一日体験入学から学校ごっこへ」の活動の実際について、聞き取り調査をした。

以下は、B教諭、C園長の写真を含む記録をもとにした調査結果である。

2月末、一日体験入学を終えた翌日、保育室に小学校から借りた机と椅子を置き、机の中には道具箱に見立てた箱に、国語と算数の教科書をカラーコピーしたものをに入れて置いた。

他にひらがな練習シート、数字のプリント、ホワイトボードを準備した。

登園してきた子どもは、早速椅子に座り友だちが増えてくると交替するようになった。

すると、「誰か先生役になって」の声に先生役の子どもが出てきて「はい、〇〇さん」と指名したり、「音読をしますよ。〇ページをみてください」と言ったりして、学校ごっこが始まった。

児童役の子どもは、手を挙げて発言したり立って教科書を持って読んだりする姿が見られ、体験入学を再現して遊んでいた。

子どもたちが、『勉強』することに大きな期待と憧



「とめる、はねる」等も真似ながら、進んで文字を書く園児たち

れを抱えていることから、できるだけ一年生の環境に近づけたいと考えた。そこで、保護者に学校ごっこの様子を伝え、筆箱は兄や姉の使った筆箱を提供してもらった。この筆箱も大人気で目を輝かせていた。

ひらがな練習シートは、クリアファイルに筆順を書いた50音をはさんでホワイトボードペンで見本をなぞったり真似て書いたりでき、何度でもやり直せるものとした。園児たちは、じっくりと取り組み、「とめる、はねる」等も真似て書いていた。

以上が、体験入学の翌日から学校ごっこが始まり、その後1週間の様子である。まだ毎日、「学校ごっこ」が継続しており、少しずつ先生役が代わってきている。

大きな変容の一つは、今まで自分の名前をかくのを嫌がっていたW児が『わ』の字を、書いたことがあげられる。

環境設定として、文字を書きたいときに書けるようにひらがな練習シートを置いておいた。これを使って練習するとうまくかけるようになり、自信がついたようである。その後は、作品袋に名前を書くとき、自分から練習すると言って書いている。そのようなW児を見て、U児も影響され、「『え』の字が心配だから」と練習していた。

また、算数プリントを教師のところに「先生みて」と持ってきた。担任がまるつけをして100点と花まるをつけると、飛び上がって喜びみんなにプリントを見せて回っていた。この様子を見ていた先生役の園児も他の園児のプリントにまるつけをする姿が見られ、遊んで行くうちに先生役をやりたがる子どもがたくさん出てきてトラブルになることもあった。

学校ごっこでは、準備した教材どれもが子どもたちにとって試してみたい憧れののものであった。特に小学校から借りた机と椅子は、一気に入学の思いを高めたようである。降園時には「明日もこの机あるの?」「いつまで貸してもらえるの」と心配そうに聞きに来る園児の姿があった。

これまでの幼稚園では、就学前の時期、お別れ会や卒園式に向けての活動ばかりに目が向きがちであった。

「幼小混合で実施する研修会」に参加して、「とまどいマトリクス」を活用したワークショップを体験した。その話し合い過程で『学校ごっこ』という取り組みを知った。環境を見直し、準備することで、自然発生的に学校ごっこが始まり嬉しそうに遊ぶ姿を見て、子どもたちの入学への期待がこんなにも強く大きいこ

とを改めて知った。

これまでの取り組みを反省すると共に、子どもたちの思いをしっかりと小学校へつなげていかなければいけないと改めて思っている。

## 5. 調査結果の考察

本研究は研究仮説を実践により検証し成果を明らかにする研究とは性格を異にし、課題を明らかにする研究である。本研究における事例は多くのデータから導き出した研究結果としてではなく、「とまどいマトリクス」を活かして「接続期カリキュラム」改善がすすんだ具体的な提示である。

以下の考察において、幼小連携及び接続カリキュラムの役割を果たしているかをふまえて、接続カリキュラム改善の在り方を確認する。その上で、調査対象園の「幼小連携」及び接続期カリキュラムから、「とまどいマトリクス」を活かした接続期カリキュラム改善の在り方を検討していくこととする。

### (1) 接続期カリキュラム改善の評価

まず、木村(2012)<sup>(18)</sup>に照らせば、A園の「アプローチカリキュラム」には、次の①～⑥の具体的実践が見られた。

①集団による遊びや話し合いや友達の前で自分の考えを語るような集団活動も取り入れる

③椅子に座って先生やお友達の話聞く場面を設ける

①③については、「生きる力」の基礎的資質能力を育成すると言う点から、「平均正答率が高い傾向が見られる学校の取組－平成26年度全国学力・学習状況調査結果【小学校】【中学校】－」<sup>(18)</sup>に関連する。そこには、次の共通項目5点が列挙されている。

○発言や活動の時間を確保して保育を進めている

○学級やグループで話し合う活動を授業などで行っている

○活動のねらいを明確にした上で、言語活動を適切に位置付けている

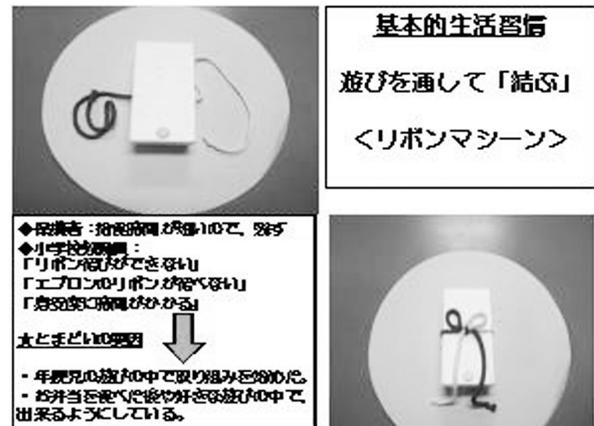
○言語活動について、活動を通じて、学校全体として取り組んでいる

○授業の最後に振り返る活動を計画的に取り入れている上記の全てが、5歳児保育実践の中で実地調査において、確認できた。

②昼食時間を小学校の時間に近づける

特に、②については、「時間」の違いという要因の課題を超えた取組に大きな価値が認められた。まず、

「昼食時間」という場面の課題を保護者や小学校教職員から聞き取っている。その実態把握を「とまどいマトリクス」に提示する。さらに、準備に多くの時間を要する「身支度」という基本的生活習慣の課題を抽出している。



その上で、「エプロンを結ぶ」という小学校で繰り返される行為を幼児教育における「リボンマシーン」という「遊び」に転換している。翌年には、正しく結ぶ、速く結ぶ、結べない友達に教え合うという活動を5歳児の4月から1年間の「時間」を確保した。子どもが主体的に「結ぶ」という活動を「できる」から「使える」レベルに定着させている。

④小学校との交流授業や行事への参加

⑤1日体験入学など、やがて自分の生活場所となる環境に慣れ親しむような機会を設定する。

④⑤についても、聞き取り調査及び現地訪問調査によって、「一日体験入学から学校ごっこへ」を取り出して、詳細に示した通りである。このように、①～⑥の具体的実践のみならず、さらなる工夫改善の具体事例が追加されたとと言える。

次に、無藤(2014)<sup>(20)</sup>に照らすと、次の3点の合致が見られる。

1点目は、「従来子どもとの交流や保育者・教師の共同というあたりの連携に止まっていたものが、それに加えて、カリキュラムの接続を重視する」ことに進んでいる。

2点目は、その内容が調査結果に具体的に見られるように「小学校を見通した教育・保育の内容を求めていた」。

3点目に、「小学校に向けてであると同時に、教育・保育の質を向上させていくため」であった。これまでの継続した実地訪問調査結果から、「とまどいマトリクス」を契機に取組の改善を確認することができた。

さらに、「幼小連携発表会」は、公開保育を通して接続カリキュラムの具体的実践から、保護者や小学校教職員への評価を問う場とした意義は大きい。

第一に、園内部の実践の脈絡に即して、教育・保育の質を問おうとし続ける取組があった。第二には、新たな方策に対して、担当教職員と園長が共に園内の合意を得ながら、最善の策を選択・決定していくプロセスがみられた。園内の構成員のモチベーションを高めるためのツールとして「とまどいマトリクス」が活用されたといえる。

以上のことから、「接続期カリキュラム」作成検討中の学校園や作成したものの改善につながった実感が乏しい学校園への示唆を与えるものであると評価できるのではないだろうか。

## 6. まとめと今後の課題

人間教育に資する接続期カリキュラムの改善に「とまどいマトリクス」を活用したことによって、次の3点が明らかになった。

(1) 「とまどいマトリクス」の活用は、接続期カリキュラム改善に向けた園内合意形成のツールの一つとなる。

(2) 「とまどいマトリクス」を継続して活用すると、子どもの実態に応じて適宜、接続期カリキュラムを改善していくことができる。

(3) 「とまどいマトリクス」の活用によって、接続期カリキュラムを改善したことで、幼小連携の特色を発信することができる。

まず、園内で「環境移行によるとまどい」を把握し、要因の分析から改善を試みる合意形成が重要である。

保護者からの聴き取りや小学校教職員による「入学後の子どもの実態」の情報を園内の教職員で共有するだけに止まるものではない。さらに、その要因を幼児教育の課題としてとらえ、接続期カリキュラム改善につなげていくことが求められる。

接続期カリキュラムを改善するためには、まず、「幼小連携のねらい」を明確にすることが重要である。ねらいに対応した実践の評価として「とまどい事例」に表れているのが、幼児教育で育った結果の学習者である子どもの姿である。「とまどいマトリクス」をツールとして活用することで、幼児期の教育から小学校への教育の「連続的な子ども理解」が深まって行く。そうすることで、教育目標や育てたい子ども像と整合する接続期カリキュラムの改善がなされる。

経験カリキュラムから、教科カリキュラムに分化していく接続期において、教育目標や育てたい子ども像の根幹をなし、学習活動を支える言語活動については、どうであろうか。今日、言葉の力を鍛えていくカリキュラムが実現しているのかということも重要な視点である。

梶田(2014)は、言葉の力を鍛えて「賢さ」の実現をするための一つとして「体験に基づく内的根拠の保持」を挙げている。それは、「豊富な体験を持ち、それを基盤に自分の実感を踏まえて、自己内対話(思考)し、結論を出したり、話したり書いたりできること。<sup>(21)</sup>」と述べている。

このことと関連して特筆すべきは、5歳児9月の話し合いにおいて、「かけこの順番を決める」活動が、担任の指示によらない場で進行していたことである。クラスの子どもが2つのグループに分かれ、まさに「実感を踏まえて、自己内対話(思考)し、結論を出したり、話したり書いたりする」姿に、「学校という存在が持つ基本使命」を果たす事の意味を再確認することとなった。

和田(2014)は「スタートカリキュラムは、子どもの実態に応じて、適宜カリキュラムを改善していく必要がある」と述べている<sup>(22)</sup>。論を待つまでもなく、「アプローチカリキュラム」もまた同様である。今後も変化するであろう「とまどいマトリクス」に表出される事例は、接続期カリキュラムの改善に適宜継続して活かすことができる。

また、接続期カリキュラムは、学校園双方の特色のポジティブな発信でもある。聞き取り調査結果をふまえた「就学前の子どもの保護者不安の集計」は必要とされる。そのような実態把握レベルから、就学前の子どもの保護者の安心感や信頼感につなげていくことができると考えられる。

その上で、「接続期カリキュラム」にもとづいた活動後の評価を園内、保護者、小学校教職員にフィードバックすることが、重要である。教育課程に位置づけ、無理なく意味のある実践を日常的に設定する中で、幼小双方の呼応関係と継続した互惠関係が構築されていくのである。

換言すれば、「とまどいマトリクス」を接続期カリキュラムの改善に活かすことは、保護者や地域住民に学校園を理解される手段になるということでもある。また、教職員にとっては、資質向上、モチベーションの高揚につながる。何よりも、子どもにとって、小学校入学への不安を軽減し、期待と充実感を生み出すこ

とになるだろう。

人間教育に資するという点から、梶田(2014)が述べている「現在の学校教育がはらむ息苦しさから学習者を解放していく」ことについてはどうであろうか。学習者の視点に立って作成された「入学後の子どもとまどい」を検討した結果、「連続した子ども理解」をもとに、人間的成長の面を重視した取組を指導者が協働的に深めていくことができるといえるだろう。

次に示すのは、認識の具体的なレベルを示す<総括的な目標>である。梶田(2014)が強調する「学習者一人ひとりの个性的で主体的な成長を実現していく教育」<sup>(23)</sup>は、取組事例で具体提示された。つまり、「とまどいマトリクス」の活用によって、これからの幼小接続期カリキュラムの改善に寄与する可能性を見いだせたといえる。

しかし、本稿では、次の2点についての検討が十分ではない。

第一に、小学校における「スタートカリキュラム」の作成と改善が明らかにされていない。接続期カリキュラムの評価を経年比較することによって、取組の成果と課題が明確していくことが残されている。

第二に、接続期カリキュラム改善の視点を明確にするに至っていない。このことは、接続期カリキュラムを継続して改善する学校園体制の確立に関する調査が必要である。

本研究は、多くのデータから導き出した研究結果としてではなく、「とまどいマトリクス」を活かして、接続カリキュラムの改善が進んだ具体的な提示である。

今後、取組に着手する学校園に、あるいは実施はしたものの改善につながった実感が乏しい学校園への示

唆を与えるものであると確信している。

合田(2015)は、『子供たちの資質・能力を育むための優れた実践を特定の学校や教師の「個人芸」からわが国の学校教育の「標準装備」とし、各学校における学びの質の転換を図るための具体的なたてだての確立』を次期学習指導要領実現のための課題の一つとしてあげている<sup>(24)</sup>。

ここに見てきたように、人間教育を拠り所として、教育活動やカリキュラム等といった教育の具体的な在り方に関する面から、「これからの幼小接続」に寄与する工夫改善について、さらに深めていくことを今後の課題としたい。

## 引用文献

- (1) OECD 『OECD Publishing Starting Strong II: Early Childhood Education and Care』 Online service pp 444,2006
- (2) 合田哲雄『文部科学省の政策形成過程に関する一考察』日本教育行政学会年報 NO, 35, pp2-21, 2009
- (3) 訳星三和子, 首藤美香子, 大和洋子, 一見真理子 『OECD 保育白書—人生の始まりこそ力強く: 乳幼児期の教育とケア (ECEC) の国際比較』明石書店, pp56-59, 2011
- (4) 文部科学省『幼児期の教育と小学校の教育の円滑な接続の在り方について』(報告) p29, 2010
- (5) 文部科学省『スタートカリキュラム編成の仕方・進め方が分かる スタートカリキュラムブック』文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター p2, 2015年1月

別表1 とまどいマトリクス (善野 2012)

学びの基礎力「知・徳・体」		「とまどい」事例と6つの要因	①時間	②空間	③人間	④もの	⑤技能	⑥心情
知	③ 身近な社会生活、生命及び自然に対する正しい理解							
	③ 身近な社会生活、生命及び自然に対する思考力の芽生え							
	④ 言葉の正しい使い方							
	⑤ 豊かな感性と表現力の芽生え							
徳	② 家族や身近な人への信頼感							
	② 自律及び協同の精神							
	② 規範意識の芽生え							
	② 集団生活を通じて、喜んでこれに参加する態度							
体	③ 身近な社会生活、生命及び自然に対する興味、態度							
	④ 相手の話を理解しようとする態度							
	① 健康、安全で幸福な生活のために必要な基本的な習慣							
	① 身体諸機能の調和的発達							

- 文部科学省初等中等教育局幼児教育課(2011)平成22年度幼児教育実態調査
- (6) 東京都教育庁『東京都公立小・中学校における第1学年の児童・生徒の学校生活への適応状況にかかわる実態調査』平成21年  
[http://www.kyoiku.metro.tokyo.jp/ppress/ppr091112/ppr09\\_1112\\_s.pdf](http://www.kyoiku.metro.tokyo.jp/ppress/ppr091112/ppr09_1112_s.pdf)
- (7) 和田信行『小学1年生『わくわくドキドキ』カリキュラム－幼小連携・生活科を核にして－』学陽書房, p2, 2008
- (8) 無藤隆『幼児教育から小学校低学年の教育へ』せいかつ&そうごう日本生活科・総合的学習教育学会第14号, pp36-43, 2007
- (9) 善野八千子『幼小接続期におけるカリキュラム開発Ⅲ～入学後の子どもの戸惑いに着目して～』奈良文化女子大学紀要第43号, p85, 2012
- (10) 文部科学省初等中等教育局幼児教育課平成22年度幼児教育実態調査 p422011
- (11) 文部科学省『連携から接続へと発展する過程のおおまかな目安(幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について)幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議, 平成22年11月11日
- (12) 梶田叡一『<現代っ子>に人間教育を』ERPP, p54, 2014
- (13) 木村吉彦監修・仙台市教育委員会編『『スタートカリキュラム』のすべて仙台市発信・幼小連携の新しい視点』ぎょうせい pp15, 2010
- (14) 横浜市こども青少年局, 横浜市教育委員会『第1章育ちと学びをつなぐ接続期のカリキュラム』p2, 2012
- (15) 木村吉彦『幼小連携論』宮城教育大学集中講義資料 p7, 2012  
<http://sun-cc.juen.ac.jp/~kimura/H24miyakyoudai.pdf>
- (16) 無藤隆『はじめての幼保連携型こども園教育・保育要領ガイドブック』フレーベル館 p105, 2014
- (17) 前掲書(9) p80
- (18) 前掲書(15) p105
- (19) 文部科学省  
<http://www.nier.go.jp/14chousakekkahoukoku/highlights.pdf> 『平均正答率が高い傾向が見られる学校の取組－平成26年度全国学力・学習状況調査結果【小学校】【中学校】』
- (20) 前掲書(16) p105
- (21) 梶田叡一『言葉の力を鍛えて『賢さ』の実現を』教育フォーラム54 各教科等の学習を支える言語活動人間教育研究協議会編金子書房, pp6-7, 2014
- (22) 和田信行『スタートカリキュラム作成上の留意点』文部科学省『初等教育資料2014年12月号 No.920』東洋館出版, p8, 2014
- (23) 梶田叡一『<現代っ子>に人間教育を』ERP, p54, 2014
- (24) 合田哲雄『これから求められる教育のグランドデザイン－次期学習指導要領のねらい－』財団法人教育調査研究所教育展望 p9, 2015

#### 参考文献

- ・善野八千子・前田洋一『力と夢を育てる新しい学校づくり』教育出版, 2014
- ・善野八千子「生活科の学力と求められる指導力」『<教育フォーラム34>教科の学力・指導力』金子書房, 2004
- ・善野八千子・前田洋一『幼児期と児童期の接続カリキュラムの開発』(MJ-Books), 2011
- ・善野八千子「学校評価を活かした幼小連携」『<教育フォーラム40>教師という道』金子書房, 2007